

国文研ニュース

No.58 WINTER 2021



こまちはな
『小町花あはせ』

目次

●メッセージ	
日本学会議とアーキビスト養成	高埜 利彦 1
●研究ノート	
近世公家の漢詩文と儒学	山本 嘉孝 2
●エッセイ	
西教寺の閩版	中本 大 3
マイクロ資料と共同研究	小秋元 段 5
●トピックス	
アーカイブズ・カレッジとクラウドファンディングという新しい試み	加藤 聖文 7
一冊対談集 クリエーターと語るこの国の古典と現代	
— 第4回 宮本亞門氏 第5回 川上弘美氏 —	北村 啓子 8
社会連携推進室「ぶらっとこくぶんけん」	
こくぶんけんカフェ「病と立ち向かう江戸時代の人々—文学・歴史から学ぶこと—」	山下 則子 9
ないじえる芸術共創ラボ アウトプットイベント2件について	有澤 知世 9
富山市立図書館 山田孝雄文庫セミナー	岡田 貴憲 10
第13回日本古典文学学術賞受賞者発表	11
第13回日本古典文学学術賞選考講評	田中 大士, 中嶋 隆 11
短期アーカイブズ・カレッジ (10/26 - 31)	藤實久美子 13
企画展示「戦国武将たちの愛した文学—幸若舞曲—」	糸 汐里 13
総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況	14

日本学術会議とアーキビスト養成

高埜 利彦（国文学研究資料館運営委員、学習院大学名誉教授）

日本学術会議の会員6名を総理大臣が任用しないという問題が、2020年10月以降発生している。国会やマスコミでも取り上げられ、あらためて日本学術会議の存在が目されることになった。日本学術会議とは何をすることか、政治家にも社会にも理解されていないことに驚くとともに、そういうものかもしれないとの思いもする。第22期～23期（2011～2017年）に会員を勤め、その前と後に連携会員を担っており、ほとんどボランティア活動で行ってきたことが、他者からは理解されにくいのだということを思い知らされている。このことは、理解されにくい人文科学に携わる研究者にも共通の悩みであろう。

日本学術会議の役割は、日本学術会議法に規定され、政府からの諮問に答申したり、政府に勧告したり、1985年（第20期）からは提言を公表し政府や社会がこれを受け入れて実現を図ったり、そのほか折々に声明などをおこなってきた。1949年の設立から、諮問・答申は多くなされたが、次第に少なくなり1969年（第7期）で終わる。勧告も次第に減少し1991年（第14期）で姿を消す。その代りに、提言が2005年（第20期）以降増加していき、最近の第24期（2017～2020）には提言が85件、報告が23件発出されている。

この趨勢は、日本学術会議に対する政府の考え方を反映した結果であると理解される。政府は当初日本学術会議に頼りながら諮問をし、勧告に耳を傾ける姿勢を持っていた。しかし政府独自に科学技術政策を進める態勢を整えると、学術会議に頼らず、諮問を止め、政府に強く勧める勧告を不要とし、かわって提言だけを出させ、その中で使えるものは用いる、という姿勢になった。そうするために、1981年中山太郎総務長官による日本学術会議への介入や、2005年の日本学術会議法改正などが試みられ、いわば「形骸化」が進められてきた。今回の事も、その延長上に捉えることができる。

良好な関係であった1949年、歴史研究者96名によって「史料館設置に関する請願」がなされた。戦前の天皇と国家の「支配者の歴史」ではない庶民の歴史研究のために、散逸の危機にあった個人・家・地域のアイデンティティとなる歴史資料を保存するため、国と地方に史料館（アーカイブズ機関）を設立することを請願した。その請願書の原本は当館に保存されている。文部省を通しての文部省史料館設立の計画は吉田茂総理大臣から日本学術会議に諮問がなされ、日本学術会議会長からの答申を経て、1951年に文部省史料館が設立された。さらに1959年日本学術会議は「公文書散逸防止について」の勧告を発し、公文書館の設立を切望した。政府の行政文書を対象に保存管理を要求する勧告で、1971年に国立公文書館が設立された。また1966年に日本学術会議は「国語・国文学研究資料センター

（仮称）」の設置を政府に勧告し、1972年に国文学研究資料館が創設され、文部省史料館が組織に入れられることになった。

文部省史料館の設立請願は、個人・家・地域の歴史資料、いわば庶民の史料を保存・管理するところにあっただが、全国にあるこれらの歴史資料を誰が保存・管理するのか、その担い手の養成が求められた。文部省史料館では1952年から「近世史料取扱講習会」を開催し1週間程度の講習によって、近世史料取扱者の養成を行なった。今日のアーキビスト養成の出発点となるもので、これを発展させて1988年には「史料管理学研修会」に名称変更するのみならず、内容を世界のアーキビスト養成の標準に学び、長期課程が8週間、短期課程が2週間行われることになった。その後さらに内容を充実させ、2002年に名称を「アーカイブズ・カレッジ」に改め今日に至る。

日本学術会議は1980年に「文書館法の制定について」の勧告を政府に行うが、岩上二郎参議院議員の議員立法によって1987年に公布された。しかし、当分の間、専門職員を地方の公文書館に置かないことができるの附則が付けられたことから、アーキビスト養成問題が、それ以降重要課題となった。日本学術会議ではその後、アーキビスト養成の要望書や提言を出し、附則の撤廃や、アーキビスト資格制度確立などを提言した。この間、2004年に日本アーカイブズ学会が設立され、登録アーキビスト制度が始まり、2008年には学習院大学大学院アーカイブズ学専攻が文部科学省によって設置認可された。

アーキビスト養成制度の環境が整備される中で、2020年からアーキビストを公的に認証する「認証アーキビスト」の制度が始まった。有識者によるアーキビスト認証委員会が審査し国立公文書館長が認証する制度で、初年度の申請者は248人を数えた。申請基準が設けられており、学習院大学大学院アーカイブズ学専攻修士課程修了や国立公文書館の研修を修了した者のほかに、当館のアーカイブズ・カレッジ長期の修了者は、その上に3年の実務経験などで認証されることになる。アーカイブズ・カレッジの実績が公的な認証制度の中に位置づけられたのである。

近世公家の漢詩文と儒学

山本 嘉孝 (国文学研究資料館准教授)

これまでの日本近世漢文学史・儒学史は、武家と民間を中心に叙述されてきた。その中であって、近世中期の堂上歌学と熊沢蕃山の儒学の関係について明らかにした海野圭介「儒学と堂上古典学の邂逅—『源氏外伝』の説く『源氏物語』理解を端緒として」(同『和歌を読み解く 和歌を伝える—堂上の古典学と古今伝受』(勉誠出版、2019年)所収、初出2012年)や、近世後期の公家・門跡と在野の漢詩人の交遊に焦点を当てた合山林太郎「梅辻春権—妙法院宮に仕えた漢詩人」(飯倉洋一・盛田帝子編『文化史のなかの光格天皇—朝儀復興を支えた文芸ネットワーク』(勉誠出版、2018年)所収)は貴重な研究である。近世公家の漢学については、今後も明らかにされるべき事項が多く残されている。

従来の研究でとりわけ看過されてきたのは、近世の公家が制作した漢詩文である。盛田帝子氏に御教示頂くまで、筆者自身、近世堂上漢詩の存在すら認識できていなかった。盛田帝子「光格天皇主催御会和歌年表—天明期編」『大手前大学論集』第17巻(2017年3月)・同「光格天皇主催御会和歌年表—寛政期編」『大手前大学論集』第18巻(2018年7月)によると、光格天皇は、天明3年(1783)9月13日と寛政12年(1800)9月13日の二度にわたり当座詩歌会を主催した。それぞれの会で光格天皇と公家が詠んだ詩歌30首は、『内院和歌御会』第36冊(国立国会図書館蔵、請求記号:853-177)と『内裏和歌御会 寛政十二年』(国立国会図書館蔵、請求記号:124-202)に収録されている。

本稿では、天明3年の詩歌会について紹介する。図版は、国立国会図書館デジタルコレクションで公開されている前掲書『内院和歌御会』の画像で、冒頭には「天明三年九月十三日 詩歌御当座」と記されている。左丁裏まで続く詩歌の末尾には「題者 右衛門督」とあり、題者が冷泉為章であったことは確認できるが(『公卿補任』参照)、30題が組題集の類から取られたかは不詳である。

30首の内、漢詩は11首で、すべて七言絶句である。これらの和歌題詩の作者には、院執権の久我信通、賀茂伝奏の烏丸光祖、文章博士の唐橋在熙と桑原為弘(後に忠長)、明経博士の船橋則賢のほか、高辻胤長や中山愛親など、光格天皇に近侍した公家が含まれる。

冒頭の御製歌の次には、「嶺上月」題を与えられた桑原為弘の制作した漢詩が載る。書き下しとともに掲げる。

嶺頭雲散月輪生 嶺頭の雲散じて月輪生ず
 城上秋光夜色清 城上の秋光夜色清し
 一望猶余此時興 一望して猶ほ余此の時の興
 影中須数雁群横 影中須らく雁群の横ぎるを数ふべし
 (下平八庚韻)

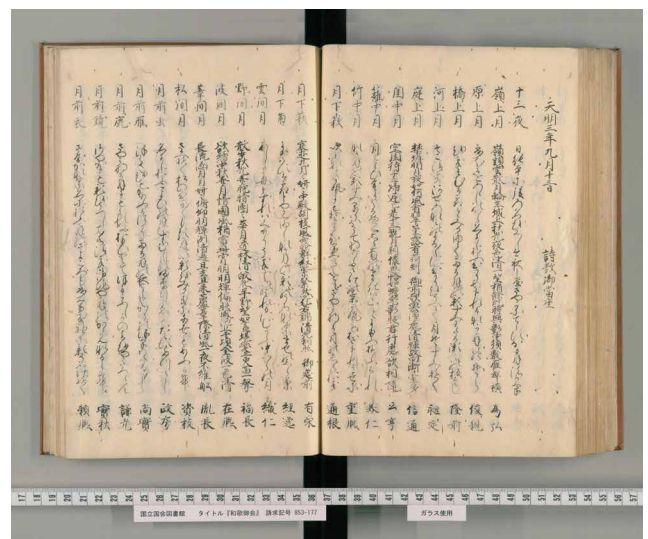
大意は「山のいただきの雲が消え、まるい月が出た。

町の上に秋の(月の)光が輝き、夜景は明るく澄んでいる。一目見渡すと、この一時の興趣はありあまる。光の中を横切って群れをなして飛んでいく雁を数えられる(ほど明るい)というもの。「嶺月」や「嶺上月」の題を持つ後水尾天皇の和歌(『新明題和歌集』所収)にも用いられる「峰の雲」の語が「嶺頭雲」と漢訳されて第1句に詠み込まれ、第4句は『古今和歌集』秋歌上の「白雲にはねうちかはしとぶかりのかずさへ見ゆる秋のよの月」(題しらず、よみ人しらず、『新編国歌大観』)を踏まえる。和歌題詩に和歌由来の素材が取り込まれることは一般的だが、後水尾天皇の御製や最古の勅撰和歌集を踏まえたと思しい為弘の作詩は、天皇や朝廷文化の称揚として解せよう。

また、第3句の「猶余」と「興」の組み合わせは、明代の詩に幾つか例があるが、為弘は、『本朝無題詩』の用例を意識した可能性がある。同書(宮内庁書陵部蔵)には、藤原周光「夏日遊林亭」(巻中・林亭)に「林亭静処興猶余」、中原広俊「秋日江州館下即事」(巻中・旅館)に「城東(ママ)景興猶余」という句がある。この会で詠まれた漢詩には、他にも、平安朝の日本漢詩や、平安時代によく学ばれた白居易への傾倒を示唆する詩語が見出せる。

堂上の漢文学や儒学と、近世後期、特に光格天皇の時代に活発化した朝廷文化の復興とが、どのような関係性にあったのか、今後調査していきたいと考えている。

なお本稿は、飯倉洋一氏代表科研基盤B「近世中後期上方文壇における人的交流と文芸生成の〈場〉」公開研究会Ⅱ(2019年3月2日於大阪大学)での口頭発表「光格天皇歌壇と漢詩—天明三年九月十三日当座詩歌会を中心に」の一部に基づく。



『内院和歌御会』第36冊(国立国会図書館蔵、請求記号:853-177)

DOI: 10.11501/2566557

URL: <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2566557/138>

西教寺の閩版

中本 大（元国文学研究資料館資料分析専門部会委員、立命館大学文学部教授）

国文学研究資料館（以下、「資料館」と略称）の資料収集は、さまざまな意味で日本文学研究のあり方を大きく変えたと思っている。1970年代以前の、所蔵先との個人的機縁に基づく関係構築に大きく依拠した典籍調査——もちろん現在に至るまでこの関係性を培う能力こそが文献学的研究における大切な手蔓であることは間違いないものの——とは大きく異なる若手研究者育成を企図、標榜した調査体制の確立が進められ、実践されることになったのである。これは画期的な変革である。それまでの職人的なあり方、「匠師の背中を見て学ぶ」や「文献学・書誌学的手法とは教わるものではなく、盗んで覚えるもの」といったような前近代的な方法論は淘汰、払拭され、新たな「共同研究」の枠組みに変貌したのである。かく言う私も、その恩恵に浴した一人である。

資料館の文献調査には、長く関わってきたものの、最も思い出に刻まれているのは、大学院在学時代に参加した二つの寺院調査、近江坂本西教寺正教蔵文庫と京都仁和寺所蔵紺表紙小双紙の調査である。後者は現在の仏教説話研究だけでなく、中世文学研究の思潮そのものを牽引する阿部泰郎氏が山崎誠氏とともに開拓、考究、そして紹介された、後白河院皇子で仁和寺御室となった守覚法親王の手になる三百余冊に及ぶ浩瀚な仏事法会の記録の書写本である。私は阿部氏のお声掛けで、その撮影の助手を務めたのである。それまでも古典籍にふれる機会は皆無ではなかったものの、刹那で消えてしまう祈りの機微や敬仏に由来する身体表現を、ある種の使命感に突き動かされたかのように、真摯な姿勢で書き写した記録群から滲み出る「本の魔力」に魅せられたのは、生まれて初めての経験であった。その世界に導いてくれた阿部氏は私にとって忘れられない斯道の先達となった。

さて前者、西教寺正教蔵である。西教寺の正式名称は天台真盛宗総本山戒光山兼法勝西教寺、聖徳太子の創建と伝えられ、元三大師良源や、恵心僧都も修行したという名刹である。2020年の大河ドラマで取り上げられている明智光秀一族の墓所として知られるのは、織田信長の比叡山焼き討ちの後、光秀によって速やかに再建された所以である。ここに所蔵される「正教蔵」が叡山文庫真如蔵・日光天海蔵と併称される天台聖教の一大蔵書であることは、中世文学研究者や古典籍愛

好家であれば周知の事実であろう。国文学研究資料館が正教蔵の調査に着手したのは、昭和五十六年頃だったかと思うものの、私が実際に調査に参加し得たのは、平成三年、いや四年、すでにマイクロフィルム撮影も終わりかけた頃であった。

この調査の領袖は故伊藤正義先生であった。

ここで伊藤先生の学恩を述べ始めたら、たちまち紙幅が尽きてしまうものの、その視野と懐の広さは、多くの中世文学研究者の畏怖と敬愛とを集める存在であった。西教寺調査は伊藤先生の警咳に接する好機、「中世文学研究会」の夏季合宿でもあったのである。

資料館側の責任者は当初は小林健二氏、小林氏が大阪に移られてからは伊藤門下の樹下文隆氏が務めておられた。昔ながらの懐かしい調査カードによる書誌調査が一段落した後は、正教蔵の奥書集成に向けた取り組みに着手することとなった。それまでの牧歌的調査、本と向き合う純粋な喜びや驚きからは少しずつ距離が生じ、新たに資料館に赴任した落合博志氏を代表とする科学研究費共同研究として実施された。それまで「そうした手腕から最も遠い人」という勝手な印象を抱いていた落合氏の事務処理能力や、適切な差配の力量に瞠目しつつも、限られた年限で成果を捻り出すという「ノルマ」に、多くの調査参加者が少しずつ窮屈さを感じ始めていたのも事実であった。研修道場での作業が、寺務所での調査であれば聞こえてきた、不断念仏の鉦——室町時代の文明年間に真盛上人によって不断念仏の道場として再興されて以来、絶えることのない荘厳な響き——が届かないことも、筆を持つ手を重くした。

そうしたなかで、全く変節しているように見えなかったのが伊藤先生であった。あくまでも透徹、学問に対する一途な姿勢は変わることなく、淡々と書物に向き合っておられた。私は先生の直接の教え子ではなかったこともあり、比較的自由に教えを受けることができた。もちろん常に緊張はしていたのだが。

そうした調査が続いたある年の夏、正教蔵形成の根幹を為す芦原観音寺住持、舜興所蔵の見慣れた奥書を持つ唐本を閲覧する機会があった。現在の福建省で出版された版本である。福建は朱熹の出生の地であるとともに逝去の地としても知られている。朱子の没した建陽は中国を代表する一大出版拠点で、木版印刷の中心地であった。「建安本」とも総称されるその書籍群は、日本にも

多く齎された。特に建安刻本を代表する「上図下文」様式は、元代に誕生した後、新たな定型となり、多くの知識人を魅了したのである。印刷・料紙ともにすぐれた典籍が版行された一方、驚くほど粗雑な「閩版」も多かった。紙を節約するため、中途から半丁を切断することも厭わない経費削減方針の徹底は、書肆の商魂を感じさせる一方、日本の写本優位の対極にある中国の版本崇拜の強固さを実感させるものでもある。出版されなければ書物としての価値は無に等しいのである。

そうした粗雑な閩版が舜興蔵書に収められていたのがあった。私がおその本を披閲していると伊藤先生がお越しになり、建安本の解説をしてくださった。

*

伊藤先生を慕う春秋に富む俊英が集まる、まさに梁山泊であった中世文学研究会に私が初めて参加したのは平成三年、初めての学会発表を終えた頃であった。その折りの発表者は王冬蘭氏で、観世弥次郎長俊作の能「呂后」の典拠として『全相平話』の一編である『前漢書平話』を想定し、検証する内容であった。この研究成果は「芸能史研究」に掲載され、王さんのご著書にも採録されている。私は夙に林羅山の手沢本のなかに上図下文の『全相平話』があることに関心を抱き、内閣文庫本の調査をしていたこともあり、新参にも関わらず質疑したのであった。『全相平話』は中国元代の至治年間（一三二一～一三二三）に建安の書肆である虞氏が刊行した建安本の一つである。伊藤先生はそれを憶えてくださっていたのであった。

伊藤先生のご教示は書誌だけでなく、舜興が貴重な仏書を刊行後ただちに購入した事例は数多いこと、集書への情熱は和刻本だけでなく、玉石混交の唐本にまでも及んでいること、さらには城主に準じる地位を与えられ、権勢を誇った観音寺の財力のことなどにも及んだ。日本美術史の研究者にとって芦浦観音寺は、「王会図」という画題の、諸侯が王に謁見する場面を描いた、まさに織田信長を寿ぐかのような六曲一双屏風の異国情緒あふれる絵画の名品を所蔵していることでもよく知られている。安土にも近い観音寺は、歴史的にも重要な役割を担っ

ていたのである。しかし私にとっての観音寺は、書物に埋もれ、舌嘗めずりしながら、新たに入手した書籍に奥書を記す舜興のイメージそのものである。集めた本を前にどのような感慨に浸り、いかほどの愉悦で丁をめくったのか——粗雑な閩版に挟まれた鴨脚の押し葉を眺めながら、往時の舜興に思いを馳せ、見ぬ世の人を友としたのは忘れられない思い出である。

かように資料調査の思い出は尽きない。言い続ければ結局「本」と「人」への追憶である。さまざまな機関から優れた研究者が参集するため、空気の張り詰めた他流試合の場でもあり、胸襟を開いて自分自身の構想を説く絶好の場でもあった。もちろん深夜のビール買い出しや夜を徹した語り合い、芙蓉園の近江牛も忘れ難い思い出である。

DXの進展で、こうした泥臭い機会は減り、AIの助力を当然のように仰ぎつつ、それでも学問や研究の根幹の一つが想像力である限り、我々の世代で、こうした出会いの機会を若手研究者から奪ってしまうことは、身を切られる思いである。新たな「本と人との出会いの場」は創り出せないものか、新規に構想された「国際コンソーシアム」の展開に期待しつつも、来し方を振り返り、嘆息するばかりである。

マイクロ資料と共同研究

小秋元 段 (国文学研究資料館共同研究委員会委員長、法政大学文学部教授)

文学研究は個人の蓄積や感性がモノをいう世界ですから、本来、共同での研究はなじみません。しかし、新しい理論や方法、テーマなどを共有し、研究に新たな潮流を生みだそうとするときや、大量の資料に何らかの整理をつけなければならないときには、有効に作用することがあります。とりわけ、国内外の資料を網羅的に調査し、マイクロフィルムやデジタル画像として収集する国文学研究資料館が、後者のタイプの共同研究を実施する格好の場であることは、いうまでもありません。

国文学研究資料館の共同研究は1977年度に始まったようですが(国文学研究資料館『十年の歩み』1982年)、その成果のなかで、私には忘れられない一冊があります。それは村上學氏編の『平家物語と語り』(三弥井書店、1992年)です。本書は1991年度の公募研究「平家物語と語り物文芸性に関する研究」の成果としてまとめられたもので、研究代表者の村上學氏をはじめ、志立正知・千明守・松尾葦江・横井孝・佐伯真一・鈴木孝庸の各氏が論考を寄せています。ポストモダンに由来し、古典文学研究にも応用されていた〈語り〉論に加え、「いくさ語り」といった場合の〈語り〉や、「平曲」の〈語り〉など、『平家物語』研究には概念を異にする多様な〈語り〉の語が存在します。しかし、それが研究者間で曖昧なまま用いられているため、理解の共有をめざそうとするのが、本書の意図でした。多様な〈語り〉論を鮮やかに批評する村上氏の論文を何とか理解しようと格闘したことや、語り本系の本文流動が〈語り〉ではなく、机上の改編によって生起していたことを力説する千明氏の論に思わず膝を打ったことを覚えています。当時、大学院後期博士課程の学生であった私は、『太平記』の本文流動に中世「太平記読み」の影響があったのではないかという目論見をもって、研究していたのです。

一方、この本には、末尾に「国文学研究資料館蔵『平家物語』関係マイクロ資料解題」が載せられていたことも大きな特徴です。これは国文学研究資料館が有する『平家物語』伝本と関連書のマイクロ資料248点を対象とする略解題です。原本ではなく、マイクロ資料から知りえた情報をもとに制作された解題であるため、書誌情報はほとんど記されていませんが、写本であればその本文系統が、^{版本}版本であれば^{版種}版種が記されています。それまで館に備え付けられていた『国文学研究資料館マイクロ資料目録』では、当該のマイクロ資料がどの系統、どの版種にあたるのか、わからない部分が多かったので、これは貴重な案内書になりました。このように見てくると、村上氏らが行った共同研究は、理論・方法の共有と大量の資料の整理を二つながら成し遂げた、稀有なものであったことがわかるのです。

解題作成にあたってはすべからず原本によるべし、というのが書誌学の鉄則でしょう。しかし、そこを割り切ってマイクロ資料だけで解題を作り、利用者に一往の便宜を図るといえるのは、大きな発想の転換です。そして、その後の国文学研究資料館の仕事を見てゆくと、この『平家物語』の解題の果たした役割は非常に重要であったと感じます。こうした判断のもとなされた同様の取り組みの成果として、以下のものがあげられます。

1999～2002年

「国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる古今和歌集奥書集成(一)～(四)」、『調査研究報告』20～23、浅田徹・山本まり子・岡崎真紀子・五月女肇志・小川剛生・佐藤裕子の各氏

2002～2006年

「国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる伊勢物語奥書集成(一)～(四)」、『調査研究報告』23～26、新藤協三・丸山愉佳子・小川剛生・小野裕子の各氏

2004年

「国文学研究資料館蔵『保元物語』・『平治物語』及び『平家物語』(写本)マイクロ資料解題」、『調査研究報告』25、松尾葦江(監修)・田口寛・渡瀬淳子・小番達・清水由美子の各氏

2006・11年

「『新古今和歌集』版本の基礎的研究 国文学研究資料館蔵『新古今集』版本及びマイクロ資料解題(一)・(二)」、『調査研究報告』26・31、坂巻理恵子氏

2006年

「国文学研究資料館蔵『平家物語』(版本)関係マイクロ資料解題」、『調査研究報告』26、出口久徳氏

2009・10・13年

「国文学研究資料館蔵『伊勢物語』絵入板本和古書マイクロフィルム解題(一)～(三)」、『調査研究報告』29・30・33、藤島綾氏

2010・11年

「国文学研究資料館蔵マイクロ資料による私家集奥書集成(一)・(二)」、『調査研究報告』30・31、久保木秀夫・野本瑠美の各氏

このうち、『古今和歌集』『伊勢物語』、私家集の奥書集成は、膨大な人名を含む奥書そのものを情報の宝庫と見て編纂されたものです。ちなみに、マイクロ資料化された『古今集』の奥書によるだけで、中世から近世にかけての書物としての『古今集』の位置づけがわかることを説く浅田徹氏「古今集奥書集成から見えるもの」(『調査研究報告』30、2010年)は、この取り組みの有効性を立証する論考です。松尾氏・出口氏らによる『平家物語』のマイクロ資料解題は、『平家物語と語り』所収「国文学研究資料館蔵『平家物語』関係マイクロ資料解題」以後に収蔵された資料を対象としたものです。坂巻氏・藤島氏による『新古今和歌集』『伊勢物語』の版本解題は、それぞれ丹念な調査にもとづく労作といえるでしょう。

実は、こうした流れを振り返ると、思い出される共同研究が一つあります。それは1993年度の公募研究「軍記物語の伝本についての研究」です。長谷川端氏を代表者に、加美宏・日下力・佐伯真一・長坂成行・野中哲照・牧野和夫の各氏がメンバーで、武田昌憲氏と私がメンバー外で毎回参加していました。『国文学研究資料館報』第42号(1994年)に館内参加者であった佐伯氏による報告記事が載っています。それによれば、将来的には『軍記物語伝本書目』と呼べるような総目録を作成することをめざし、まずは『保元物語』『平治物語』『太平記』を対象に、国文学研究資料館所蔵のマイクロ資料・和古書を調査するというのがこの共同研究の概要でした。

佐伯氏からは、「国文学研究資料館蔵『平家物語』関係マイクロ資料解題」のようなものが、『保元物語』『平治物語』『太平記』にもあるとよいのではないかと、とのお話があったことを記憶しています。残念ながら、膨大な資料を前にそこまでの成果を残すことはできませんでした。忘れたくない思い出があります。その一つが日東寺慶治氏との出会いです。日東寺氏は1978年度の慶応義塾大学文学部の卒業論文として「太平記整版の研究」を出され、その成果が鈴木登美恵氏・長谷川端氏の鑑賞日本の古典13『太平記』(尚学図書、1980年)の「解題」で触れられる、いわば斯界における伝説的な存在でした。その日東寺氏を研究会にお招きし、版種の識別についてお話を伺いました。その際、『太平記』整版本の嚆矢である元和八年(1622)刊本の系統には被せ彫りの諸版(寛永八年版等)があり、覆刻か否かを見わけるためには、卷三十七の14ウ3行目に注目し、この一節が「忠賀ノ花見」とあれば元和八年版、「志賀ノ花見」と正されていれば覆刻版であるという説明があったときには、一同、あまりの細かさに息を呑んだものでした。こうした教えを賜ったことは、以後の自分の研究にどれだけ生

かされたことか、計り知れません。

もう一つ。共同研究の一環として、私は1994年3月に岩手・青森・北海道の公立図書館に所蔵される『太平記』を調査しました。市立函館図書館の館員の方は親切で、所在が予め知られており、国文学研究資料館でもマイクロフィルムを所蔵している『太平記』(寛文頃刊平仮名整版本)の閲覧を願い出たところ、「他にこのような本もあります」といって、未整理の状態の別の版本も出してくださいました。それは元和八年版の覆刻本で、剣巻を欠き、総目録・巻一・巻二を一冊にまとめる二十冊本です。注目すべきは、各冊、頂部と底部に凹みのある円形のなかに、陽刻で「鏡華」とある蔵書印を捺すところです。泉鏡花は「鏡華」とする蔵書印を多数所持しており、その印影は「鏡花全集月報」22(岩波書店、1975年)や第28回慶応義塾図書館貴重書展示会図録『鏡花の書齋「幻想」の生まれる場所』(2016年)で見ることができます。残念ながら、『太平記』に捺された印と一致するものは見あたりませんが、印文の図案化には共通性があります。鏡花には「三十銭で買へた太平記」(『鏡花全集』別巻所収。初出は『日本文学講座』第一巻、1926年)という文章があって、明治二十年頃には大版の『太平記』が「剣巻」共二十二冊で、三十銭で買えたことと記されています。剣巻の有無、冊数の違いは気になるところですが、やはり印影の雰囲気からすると、函館図書館の本は鏡花のものと考えてよさそうです。そのあたりをもう少し調べ、該書の資料的価値を明確にしたいと思い、2006年に再び函館を訪れました。そのときにはすでに図書館は移転し、立派な新館になっていました。出納ももどかしく、カウンターで待っていると、館員の方からは「その本は現在所在不明で、移転の際に失われたのかもしれませんが」との回答。もっと早く函館を再訪していれば、このような事態は避けられたと思うと、痛恨の念を抑えることができませんでした。

なお、この本はすでに国文学研究資料館による文献調査もなされていて、その際の調査カードを「日本古典資料調査記録データベース」から確認することができます。

アーカイブズ・カレッジとクラウドファンディングという新しい試み

近年、インターネットを通じて多くの人から寄付を募るクラウドファンディングが盛んです。研究機関や大学でも外部資金の獲得が求められるようになっていますが、その一つの試みとしてクラウドファンディングへの注目度は高まっています。

当館でも、2020年6月1日から8月7日にかけてクラウドファンディングをはじめて実施しました。クラウドで目標としたのは、2021年度から2年間、アーカイブズ・カレッジ短期コースの地方開催経費の確保でした。当初の目標は、2021年度・松江市、2022年度・福島県富岡町での開催経費300万円を68日かけて獲得する計画でしたが、予想以上に多くの方々から支援が集まった結果、2023年度・大分県、2024年度・長野県での開催経費200万円を追加することになり、最終的には当初見込みの倍を超える約630万円を集め、成功裏にクラウドファンディングを終えることができました。

クラウドファンディングは、外部資金獲得の一つの方法ですが、それだけに止まらず研究機関による社会に向けた情報発信と社会への研究成果の還元という面において重要な手段ともいえ、今後も積極的に活用することで国文研の存在意義をアピールできるのではないかと思います。以下、そのことを踏まえて社会貢献としてのアーカイブズ・カレッジについて触れていきます。

アーカイブズ・カレッジ事始め

アーカイブズ・カレッジは、文部省史料館がはじめた近世史料取扱講習会が出発点です。この文部省史料館とは、今から75年前、敗戦・占領という大きな社会変動と混乱のなかで古文書や庶民の生活記録が散逸の危機にさらされました。このような事態を危惧した当時の学者や財界人たち一渋沢栄一の孫で幣原内閣の蔵相だった渋沢敬三や経済史の野村兼太郎、仏教史の辻善之助、農業史の小野武夫、ヨーロッパ中世史の上原専禄など錚々たる面々です。一が国会に働きかけ、1951年に品川区戸越の旧三井文庫敷地内に設立された組織です。

設立当初の文部省史料館は、散逸の危機に瀕している古文書や生活記録の全国的収集以外にも将来的には官庁の公文書を保管する役割も期待されていました。そのような期待に応えるための人材―現在でいうところのアーキビスト―の育成を目的として、1952年から近世史料取扱講習会をはじめました。

この講習会は、1971年から1年に東京と地方の2度開催という、現在のかたちになっています。同じ年には国立公文書館が開設、1987年に公文書館法が制定されてアーカイブズをめぐる環境は大きく変わっていきました。文部省史料館は、1972年に国文学研究資料館が設置されるとその付置機関となり、国立史料館と通称されるようになりました。史料館時代の1988年には近世史料取扱講習会を史料管理学研修会に発展拡充して公文書館法に対応したカリキュラム改正を行いました。現在のアーカイブズ・カレッジ(2002年からこのように呼称)もこの時の基本的な骨格を引き継いでいます。

アーカイブズ・カレッジとクラウドファンディングを通じた情報発信

文部省史料館時代に始まった近世史料取扱講習会から国立史料館時代の史料管理学研修会を経て、現在のアーカイブズ・カレッジにいたるまで70年にわたる受講生は、4,200名を超えています。

アーカイブズ・カレッジは、敗戦直後の社会的混乱、国や地方で相次いだ公文書館設立、そして、インターネット時代の本格的な到来、情報公開法や公文書管理法など文書管理に対する社会的関心の高まりといった時代の変化に即応してきました。今回のクラウドファンディングに多くの方々から期待を込めた支援が寄せられた理由もそこにあるといえます。

そして、これまでの蓄積と努力が対外的にも評価され、一部の大学院では単位認定科目として位置づけられています。また、今秋からはじまった国立公文書館の認証アーキビスト制度でも、アーカイブズ・カレッジ長期コースの受講が認証要件の一つとして位置づけられました。

アーカイブズ・カレッジは、毎年夏に長期コース、秋に短期コースの二本立てで行っています。東京の国文研で開催する長期コースは、6週間にわたってアーキビストとして必須の基礎から応用までを学べるカリキュラムです。一方、1週間の短期コースは、アーカイブズに関心を持つ方の入門に止まらず、アーカイブズの現場に立つ方の研修にも対応できる内容になっています。なかでも、短期コースの最大の特徴は地方開催です。地方でアーカイブズの知見に触れることができる短期コースは、他の研究機関では見られないユニークな試みといえます。

21世紀に入ってから、人口減少にともなって地域コミュニティは加速度的に弱体化し、地域に残るアーカイブズも消滅の危機にさらされています。そして、それを防ぐことのできる人材も決定的に不足しています。

今回チャレンジしたクラウドファンディングは、短期コースの開催経費を獲得すること以上に、アーカイブズ・カレッジの存在意義を社会に積極的に発信して、一般市民の方々にアーカイブズの重要性を伝えることが主目的でした。そのために、メディアやSNSなどさまざまな手段を戦略的に活用しましたが、今後の広報活動にとっても得るものが多かったといえます。

今後は、クラウドファンディングによる短期コースの開催と成果を積極的に発信していかなければなりません。それらを通じて地方が抱える課題を一つずつ解決していきたいと思っています。

(加藤 聖文)

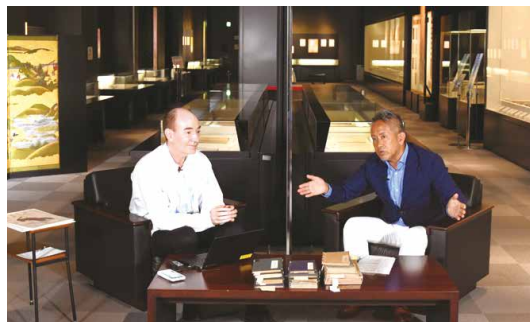
*クラウドファンディングURL <https://readyfor.jp/projects/kokubunken>

一冊対談集 クリエーターと語るこの国の古典と現代 — 第4回 宮本亞門氏 第5回 川上弘美氏 —

多くの催し物を中止せざるを得なくなった中、「ぷらっとこくぶんけん」の企画である「一冊対談集 クリエーターと語るこの国の古典と現代」をライブ配信で実施しました。2度開催した無観客対談をライブ配信した報告と、その時の技術背景を少し説明します。

7月31日 第4回 宮本亞門 × ロバート キャンベル『江戸演劇からのディスタンス』

世界中で活躍の演出家 宮本亞門氏が、コロナ禍で舞台活動をできない今と、江戸時代にやはり感染症に襲われ劇場閉鎖となった時期とを重ね、芸術家・表現者の生き様について語られました。宮本氏演出の舞台「画狂人 北斎」の舞台映像と北斎について描かれた和書との共通点を取り上げ、北斎の人となり、芸術への情熱について熱弁されました。また現在、宮本氏が企画主催「上を向いてプロジェクト」の作品『SING FOR HOPE』『DANCE FOR HOPE』の映像と、更に江戸時代の和書に描かれた芝居・劇とを観ながら、新しいスタイルの演劇創りについても熱く語られました。



10月31日 第5回 川上弘美 × ロバート キャンベル

『きみが語った今の話は、きみの物語なんだろう?』— 現代小説に現れる日本古典と愛をめぐって —

(「ないじえる芸術共創ラボ」との共同企画)

小説家 川上弘美氏が、ないじえる AIR (Artist in Residence) としての活動の集大成として、『伊勢物語』をモチーフにした新作小説『三度目の恋』を刊行されました。「江戸時代のベストセラーであった」の館長の一言が、平安時代と現代だけでなく江戸時代を介して『伊勢物語』を理解することの発見であったなどの執筆秘話、そして「愛」について多くの思いを語られました。AIR として当館研究者との交流・活動・そして気付きや、当館鉄心斎文庫の印象・受けた影響もご紹介下さいました。更に、ご本人による小説の朗読という贅沢な内容でした。



◇技術背景◇

第4回第5回は、幸い2度とも対面での対談を実現できました。江戸時代の原本を手に取り一緒に観ながらの会話は、対面ならではの醍醐味です。ライブ配信は、生放送と同じようにカメラ映像やメディアデータ(写真・ビデオ・テロップ)をコンピュータで切替えながら創る映像を、電波の代わりにインターネットで送信します。凝った映像制作もライブ配信の需要に伴い、専門業者だけでなく一般の人が使い易いソフトウェアも増えてきて、身近なものになっています。会場での直接観覧との大きな違いは、質疑応答(双方向)ができないことです。ライブ配信自体は一方ですが、チャット機能を併用し視聴者からの声をテキスト受信できます。対談中に館長が視聴者からの質問を見られる仕掛けをして、随時紹介し答える方法を取りました。視聴者が参加している感覚(臨場感・一体感)の助けになりました。

対談者が遠隔地に離れていても、リモート会議システム(Zoomなど)を組合わせてオンライン対談を実現できます。目の前のカメラ入力映像をネットの向こうからやってくる映像と入替えればよいのです。リモート会議システムの多くはライブ配信への連携が容易であり、技術専門家が居なくても手軽に行えるようになってきています。このようにサイバー空間での対談は可能ですが、和書を持ち込み手に取るのはコンピュータ技術の今後の研究課題でしょう。

今年から開催の「こくぶんけんカフェ」(p.9)をオンラインで、研修会のアーカイブズ・カレッジ(p.13)を会場での受講者とオンライン受講者が同時に研修できるハイブリッドで実施しました。これらの経験から得られた知見を含め、技術的な仕掛け・創意工夫を次号で紹介する予定です。

世の中がリモート会議システムに慣れてきたことにより、応用範囲が様々な催しに広がります。今もこれからもリモート技術を集結し上手く組合わせて、これまでのように、そしてこれまでに無かったような新しい集い方を模索していきます。是非これからの集い方の開拓にご参加ください。

(北村 啓子)

*対談・こくぶんけんカフェとも当館YouTubeチャンネルに順次アーカイブビデオ配信します。

社会連携推進室「ぶらっとこくぶんけん」

こくぶんけんカフェ「病と立ち向かう江戸時代の人々—文学・歴史から学ぶこと—」

「こくぶんけんカフェ」とは、仕事帰りの社会人に気軽に古典籍に触れて頂くために、立川駅周辺でお茶を飲みながら、国文研の研究者と話し合う場を設ける企画です。たまたまコロナ流行下であったので、Zoomでのオンライン開催になりました。初めての開催が慣れないオンラインとなったので、情報系の北村啓子准教授のアドバイスを受けつつ開催しました。定員を20名としましたが、すぐに4倍以上の応募を頂き、抽選で参加者を決定いたしました。YouTubeでも発信する予定です。関心の高いテーマだったため毎回活発なご意見を頂き、熱気のこもった時間となりました。内容は以下の通りです。

(山下 則子)

第1回 8月28日(金) 18時より19時30分

〈病〉と向き合う村びとたち — ある山村の日記から —

太田尚宏 准教授

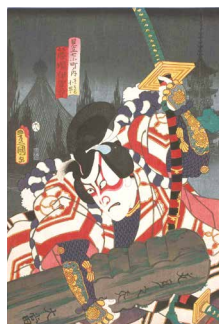
美濃国加子母村の内木彦七の日記から、18世紀中頃の疱瘡に対する村人達の行動を紹介。小屋取立(患者から逃れる小屋建設)、他村の知人宅への避難、疱瘡遠慮(目上の人への面会自粛)と現代との比較。

流行病と江戸の儒者 — 佐藤一斎の漢詩を読む —

山本嘉孝 准教授

1824年(文政7年)の麻疹流行時に、佐藤一斎が作った漢詩(七言律詩)に、『詩経』大雅・板が踏まえられて、民を苦しめる疫病に油断するなという武家を戒めるメッセージが込められている可能性を指摘。

第2回 9月4日(金) 18時より19時30分



1858年安政コレラと江戸

渡辺浩一 教授

安政コレラは下田経由で米軍艦ミシシッピから感染が広がり、沿岸部や本所深川地区に死者が多かった。治療法が確立していなかったため、人々は神輿を担ぐなど宗教に頼ったが、群集状態を避けるなどの秩序だった行動もとっていた。

幕末役者見立絵と感染症

山下則子 教授

幕末期には、役者見立絵という、ある物を別のある物に擬える歌舞伎上演に即さない役者絵が流行した。特に感染症が流行した時に多く出版されたのは、観劇が難しくても販売できるためである。中には「病魔除け」の意味を持たせたものもあったと思われる。

『見立七小町ノ内 そとわ小町 篠塚伊賀守』安政5年8月改印 3代目歌川豊国画 国文研蔵 ヌ3-53-7 DOI:10.20730/200011530

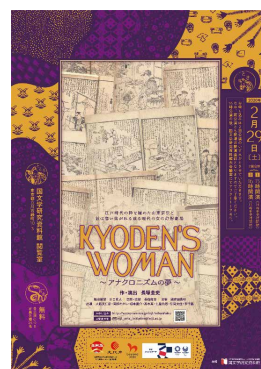
ないじえる芸術共創ラボ アウトプットイベント2件について

2017年10月より始まった「ないじえる芸術共創ラボ～アートと翻訳による日本文学探求イニシアティブ～」は、各界で活躍するクリエイターを招聘し、研究者と共に、古典籍を活用して新たな芸術的価値を創出するレジデンスプログラムを行っています。

【長塚圭史氏・演出「KYODEN'S WOMAN」公演実施報告】

劇作家・演出家・俳優の長塚圭史さんは、アーティスト・イン・レジデンス(AIR)として、約2年半にわたり複数の俳優や研究者と共に、江戸で活躍した戯作者・山東京伝(1761-1816)の黄表紙(江戸中期に出版された、大人向け絵入読み物)についての考察を深め、その集大成として、現実と京伝の作品世界が入り混じる戯曲「KYODEN'S WOMAN～アナクロニズムの夢～」を完成させました。

本作は、当館閲覧室を演劇空間に見立て、演者と観客が歩き回る形式での上演が想定



「KYODEN'S WOMAN」ポスター。
デザインには、国文研蔵の京伝作品が用いられた。

されており、2020年2月に公演を行う予定でしたが、コロナ禍により延期、同年8月30日に、朗読劇として上演されました(出演:大鶴美仁音、岡部たかし、坂本慶介、高木稟、土屋佑壺、引間文佳、李千鶴 三味線演奏:柳家小春)。

当日は、舞台美術により異空間と化した閲覧室にごく少人数の観客をお招きし、徹底した安全管理のもとで上演を行いました。

なお本作にまつわるドキュメンタリー映像を、下記特別展示にて上演予定です。

(有澤 知世)



朗読上演の様子

【開催予定「ないじえる芸術共創ラボ展 時の束を抜く ―古典籍からうまれるアートと翻訳―」について】

ないじえる芸術共創ラボの成果を一堂に会した特別展示を、当館展示室にて開催します

(会期:2021年2月15日~4月24日 なお、会期中の休室日については検討中)。

各クリエイターによる多様な作品に加え、インスピレーションの源となった古典籍を多数展示し、研究者との協働の軌跡を辿ります。

富山市立図書館 山田孝雄文庫セミナー

令和2年10月3日(土)、富山市立図書館本館(富山市西町5番1号、TOYAMA キャリ内)において、同館交流行事運営委員会と国文学研究資料館との共催による「山田孝雄文庫セミナー」が開催されました。

本セミナーは、国文研が実施している機構長裁量経費事業「地域文化拠点所蔵資料の集中的整備に基づく新たな研究基盤の創出事業」の一環として行われたものです。同事業では、全国各地に所在する資料所蔵機関との協力のもと、古典籍コレクションの集中的なデジタル画像化を進めるとともに、その所在地域における活用促進と社会への成果発信を目指しています。今回は富山市立図書館が所蔵する、地元出身の国学者・山田孝雄(1873~1958)の旧蔵書「山田孝雄文庫」をテーマに、その収蔵古典籍の特質とデジタル画像化の役割を地域の方に習知いただく場として、国文研の教員、および山田孝雄文庫に精通する館外研究者による講座が企画されました。

セミナー内容は、国文研の神作研一教授による「古典の重み」、岡田貴憲助教による「山田孝雄と平安文学」、そして筑波大学の綿抜豊昭教授による「富山藩の連歌 ―山田孝雄文庫所蔵本を中心に―」の三本立てで進められ、文学に限らない古典籍の多様性と魅力をめぐる概説、国語学者あるいは国粹主義者として知られる山田の平安文学者としての一面の考察、そして富山藩士にして連歌師だった父・方雄の下に育ち、自らも実作と蒐書に励んだ山田による貴重な旧蔵連歌資料をめぐる詳説を通して、各角度から山田孝雄文庫の価値と今後の研究可能性が示されました。会場内では各話題で取り上げた古典籍の原本が展示されたほか、セミナー終了後には担当司書の案内によるコレクション室の見学が行われ、山田孝雄文庫の世界を幅広く体感していただく機会になりました。

なお、セミナーに先立つ前日の10月2日(金)には、関連イベントとして当館のロバート キャンベル館長による講演会「日本古典と感染症」が同会場内ホールにて行われ、古典籍の基礎知識から国文研の事業、そして古典籍に描かれる江戸の疫病風景までを通観するお話に、100名のご来聴をいただく盛況となりました。

2日間にわたり多大なるご尽力を賜りました富山市立図書館の皆様、および館外から講師をお引き受けいただいた綿抜先生に心より御礼を申し上げます。国文研では今後も上記事業に基づいて、各地域における古典籍の利用啓蒙・活用促進の活動を行っていく予定です。

(岡田 貴憲)



第13回日本古典文学学術賞受賞者発表

「日本古典文学学術賞」は、財団法人日本古典文学会が主催していた「日本古典文学会賞」を継承し、若手日本古典文学研究者の奨励と援助を目的として、国文学研究資料館賛助会に設置されました。令和2年で第13回を迎えます。受賞対象者は、対象となる業績の公表時に40歳未満である研究者です（3名以内）。

今回は、平成31年1月～令和元年12月までの著書、論文等の業績を対象とし、選考委員会における選考の結果、2名の受賞者が決定いたしました。



田中 草大氏



丸井 貴史氏

■ 第13回日本古典文学学術賞 受賞者

田中 草大（京都大学大学院文学研究科 講師）

研究業績：『平安時代における変体漢文の研究』勉誠出版

丸井 貴史（就実大学人文科学部 講師）

研究業績：『白話小説の時代—日本近世中期文学の研究—』汲古書院

授賞式は新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐため、オンラインで10月16日（金）に開催されました。受賞者および選考委員会委員等は Zoom で出席し、その他関係者には YouTube で限定公開のライブ配信が行われ、授賞式の模様を御覧いただきました。

■ 第13回日本古典文学学術賞 選考委員

中嶋 隆（日本近世文学会／早稲田大学教育・総合科学学術院教授）

佐伯 真一（中世文学会／青山学院大学文学部教授）

渡邊 裕美子（和歌文学会／立正大学文学部教授）

高野 晴代（中古文学会／日本女子大学名誉教授）

田中 大士（上代文学会／日本女子大学教授）

神作 研一（国文学研究資料館賛助会運営委員会委員長・同館副館長）

落合 博志（国文学研究資料館教授）

これまでの受賞者などの情報は、当館ウェブサイト日本古典文学学術賞ページを御覧ください。

<https://www.nijl.ac.jp/outline/gakujiyutusyyou.html>

第13回日本古典文学学術賞選考講評

田中草大氏『平安時代における変体漢文の研究』

（勉誠出版、2019年2月刊）

本書は、平安期の変体漢文についての考察である。多くの資料を博捜し、優れた構想のもと書かれていることは勿論、その内実に立ち入って、それらが書き記される実情に深く迫った分析が加えられている点に特質が見られる。

従来、変体漢文については、二つの対立する見方が存する。変体漢文の筆者たちは、明確な日本語の文章を念頭に置き、筆録しているとする考えと、大体の内容が伝われば良いという態度で記され、正確な日本語文に戻すことは不可能という考えである。本書では、この二つの対立した立場について、たとえば、「以笏扇驚之」という事例を取り上げ、これは、漢語の一般的な用法である「驚」（おどろく）という意味でなく、日本語特有のオドロカス（知らせる）の意味で書き記されており、コレヲオドロカスという日本語を念頭に置かなければ成り立たないと述べ、前者の立場に立つことを言明している。このように、具体的な事例を積み上げ、変体漢文は、形こそ漢文に近いものの、

その内実は和文により近いことを証明している。

このような、分析姿勢は、「文体間共通語」という概念に象徴的に現れている。平安期の和文と漢文訓読文とでは、使用される語彙に明確な対立があると指摘されている。しかし、本書では、そのような語ではなく、和文と漢文訓読文とで共通に用いられる語の中に、それぞれで異なった使われ方が見られる点に注目し、これを「文体間共通語」と名づけ、それらが変体漢文でどのように使われているかを検証している。その従来より一歩進んだ手法によって、変体漢文に用いられる語の内実を明確に解析できる。先の「驚」は、その具体例の一つである。

また、本書は、これら平安期の変体漢文が、中世期に生ずる和漢混淆文と繋がることも具体的に論証している。これは、日本語史のみならず、日本文学史の上でも重要な指摘と考えられる。

以上、本書は、きわめて優れた内容の研究書である。よって、選考委員会は全員一致で、田中草大氏を日本古典文学学術賞の受賞者に決定した。

(文責 田中 大士)

丸井貴史氏『白話小説の時代—日本近世中期文学の研究—』

(汲古書院、2019年2月刊)

本書は、白話小説の受容史という範疇にとどまらない多様な視座から、主に初期読本について考察をした力作である。

第一部は『今古奇観』を中心とした論考から成る。第一章『『今古奇観』諸本考』は、詳細な本文異動一覧表を付した、本書の書誌学的研究の白眉とも言うべき章。成立が最も早い宝翰楼本が、「三言」の誤刻や不適切な表現を訂正し、新たな表現を加えて「原話批評」が行われたと指摘する。第二章は、都賀庭鐘『英草子』について、庭鐘が、典拠によりかかるのではなく「三言」と『今古奇観』とを校合したうえで『英草子』を執筆したと結論する。第三章では、秋成『遠駝延五登』の「古今奇観と云聖歎外の作文」という一文についての新見解を提示する。秋成が会成堂本『今古奇観』封面の「金聖歎先生評」を著者と誤解したこと、亀が人と交わる『警世通言』『仮神仙鬧華光廟』が『今古奇観』にも収められたと秋成が思い込み、書名も誤認したという新説である。『今古奇観』を訳した『通俗古今奇観』の誤訳と文体・方法について論じた第四章は、白話に造詣の深い著者ならではの、の考察。第五章「式亭三馬『魁草紙』考」では、『魁草紙』は『今古奇観』の忠実な翻刻であるという従来の評価に対し、原話改変の諸相が詳細に考察される。三馬が高い白話読解能力をもっていたこと、『英草紙』のレベルには至らなかったものの、初期読本の系譜に連なるものとして『魁草紙』を書こうとしたというのが結論。三馬論として、興味深い視点を提示している。

第二部「初期読本の周辺と白話小説」第一章は、『太平演義』を著した岡島冠山が、不遇者としての羅貫中像と儒学を生業となしえなかった自分とを重ねているという視座から、底本に『参考太平記』を採用した理由と原話の改変を考察する。第二章では、明末の「三言二拍」の一部に、訓点、左訓を施して訓訳した『小説精言』『小説奇言』『小説粹言』(いわゆる「和刻三言」)の訓読法を、唐話学の成果であるという観点から、詳細に分析した読み応えのある論考である。第三章「吉文字屋本浮世草子と白話小説」は、吉文字屋本浮世草子の白話小説利用の諸相を論ずる。具体的な指摘は省筆するが、白話小説受容を、読本中心ではない視点で捉えるべきだという筆者の主張は首肯できるが、ジャンルの成立という文学史的視座が必要になるかと思う。

第三部 第一章「方法としての二人称—読本における「你」の用法をめぐって—」は、「三言」では二人称に「你」が用いられ、文言小説では「汝」が使用される点に着目する。訓訳本で「你」が二人称として定着するが、庭鐘『英草紙』では、この新しい二人称表現である「你」を採用し、秋成『雨月物語』では、漢文訓読調の会話文では「汝」、和文調の会話文には「你」が用いられる傾向がある。山東京伝においては「你」は、白話小説との関連の濃い作品に用いられる。二人称「你」の一語に注目して、白話小説受容の通時的諸相に言及したユニークな論考。第二章は、都賀庭鐘『英草紙』『繁野話』を例に、男・女の描かれかたの位相を検討し、白話小説の受容に言及する。庭鐘とは異なった方向で男女を描いた秋成も視野に入れた好論である。第三章『『垣根草』第六篇の構想』では、庭鐘存偽本『垣根草』は、庭鐘作ではないという立場に立ち、第六篇「頼晴宗夫婦再生の縁を結ぶ事」が二話の白話小説「崔俊臣」「蔡小姐」を取り混ぜながら物語を展開していることを、丁寧に考証した。

総じて、白話小説、特に二次テキストである『今古奇観』の重要性に着目したこと、都賀庭鐘を中心にした初期読本の分析を通じて得た視点から、後期読本にいたる文学史を再構築しようとした、本賞授賞にふさわしい意欲的な研究書である。選考委員会は全員一致で、丸井貴史氏を日本古典文学学術賞の受賞者に決定した。

(文責 中嶋 隆)

短期アーカイブズ・カレッジ（10/26－31）

当館では、史資料を取り扱う専門的人材を育成するアーカイブズ・カレッジを毎年開催しています。アーカイブズ・カレッジは長期・短期の2コースを設置していますが、令和2年（2020）度はCOVID19の影響から短期コースのみの実施となりました。当館を主会場とし、現地視察プログラムでは4月1日に再オープンした東京都公文書館（国分寺市）にご協力をいただきました。

受講者数は45名でした。史料保存機関職員や大学教職員などの社会人は25名、大学院生は20名でした。今年度も多岐にわたる現場、幅広い学問分野・地域の大学院生が受講しました。対面での受講者は28名、リモートでの受講者は17名でした。対面・リモートともに当館スタッフの支援を受けてZoomやChatworkなどを活用し、講義内容を十分にお伝えし、スムーズなコミュニケーションができるように心がけました。しかし技術的な課題はやはり残りました。

今年度、国立公文書館のアーキビスト認証制度が始動しました。加えて新しい働き方や生活スタイルの模索など、アーカイブズをめぐる環境は大きく変化し続けています。今後もアーカイブズ学の人材育成に努めてゆきたいと考えています。

短期アーカイブズ・カレッジのカリキュラムはつぎのようでした。

科目：アーカイブズ総論／アーカイブズ資源論／アーカイブズ管理論／アーカイブズ管理の実際

講師：当館教員6名、外部5名

（藤實 久美子）



企画展示「戦国武将たちの愛した文学 — 幸若舞曲 —」

2020年11月4日より12月25日まで、人文知コミュニケーター*の成果発信の一環として、企画展示「戦国武将たちの愛した文学 — 幸若舞曲 —」を開催いたしました。幸若舞曲とは、室町後期から江戸初期にかけて流行した語り物芸能です。源義経や曾我兄弟をめぐる長編の語りは、戦国の世を生き抜く武将たちに愛好され、舞手の中には召抱えられ陣中で舞う者もいました。洛中に進出し、有力な芸能集団として台頭してゆくと、貴賤上下を問わず人気を集め、読み物としての需要が高まります。絵入りの草子「舞の本」が出版され版を重ねたほか、これらを粉本とした絵巻や奈良絵本が多数制作されました。展示では文学・芸能・美術にまたがる幸若舞曲の世界を、「一 はじめに」「二 幸若舞曲の流行」「三 幸若舞曲を読む」「四 幸若舞曲を描く」の四章に分け解説しています。



ギャラリートークの様子

展示の見どころは、幸若舞曲の物語世界を、実際の書物を目の前にしながら、楽しめることです。例えば弁慶の名とともに広まった「勸進帳」「立ち往生」という言葉。これらが、源義経の没落と死を描く作品『富樫』『高館』の名場面からきていることはご存じでしょうか。幸若舞曲は日本の伝統芸能である歌舞伎・文楽の基礎を築き、なおかつ人間の愛憎、肉欲、富貴と没落とといった、現代劇に通用するドラマツルギーを持っています。しかしながら、現代語訳は刊行されておらず、一般には普及していません。この展示では、有名な場面の挿絵を展示箇所を選び、解説にあらすじをつけることで、幸若舞曲を知らない人でもできるだけ多くの作品を味わえるようにいたしました。今後も知られざる古典文学の世界を、展示室を通して発信していきたいと思えます。（糸 汐里）

*人文知コミュニケーター…人文学研究者と社会をつなぎ、人文学研究の力や研究の面白さを伝える役割を担う研究員のこと。人間文化研究機構が実施する取組の一つ。

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

絵入本、源氏物語、民俗音楽、海洋民・英語をとおして自身の研究を見つめ直す 「日本を研究対象とする学生のための英語講習会」開催

9月から11月にかけて、日本文学研究専攻では「日本を研究対象とする学生のための英語講習会」(以下「英語講習会」)を開催しました。この英語講習会は、日頃英語から離れている学生に英語感覚を取り戻してもらい、自分自身の研究内容に関する英語表現を身につけてもらうことをねらいとして開催しています。講師には、日本文学研究者でもあり、翻訳・通訳者等としてご活躍中のファリア・アンナマリエ氏(Ph.D.)をお迎えしています。



自身の研究内容を英語で紹介する受講生

今年度は日本文学研究専攻だけでなく、地域文化科学研究専攻、比較文化研究専攻、国際日本研究専攻の学生も参加し、文化科学研究科の多彩な研究内容を再認識しました。

受講生は講師から学会など学術的な発表の場でよく使われる英単語や英語表現を学ぶとともに、自身の研究について英文要旨を作成しました。絵入本、源氏物語、民俗音楽、漁民・海洋民など受講生の研究対象はさまざまですが、普段慣れ親しんでいる内容でも、英文で要旨を作成するとなるとなかなか表現が浮かばず苦戦する場面もありましたが、講師からアドバイスを受けて熱心に英文を練っていました。

また、学生同士の交流も活発で、普段はあまりふれる機会のない多様な研究内容に興味津々の様子でほかの受講生に質問を投げかける姿も見られました。

この英語講習会は第1期と第2期に分け、全6日間、合計12コマで開催しています。第1期は11月に終了し、2021年1月から第2期を開催します。受講生は最終回でのプレゼンテーションを目指して、引き続き英文の作成と発表練習に取り組みます。

2020年度オープンキャンパス(入試説明会) オンラインで開催

日本文学研究専攻のオープンキャンパス(入試説明会)が10月10日(土)、Zoomによりオンラインで開催されました。

参加者は専攻の特色や入試について説明を受けた後、複数の教員による研究紹介を聴講し、中世の作品から近代の小説まで、当専攻ならではの幅広い研究の一端にふれていただきました。また、学生生活などについてざっくばらんに話していただけるよう、参加者と在学生のみで懇談する時間も設けました。このほか、教員との個別相談の機会も設けられ、参加者は、専攻の教育指導内容について、自身の研究テーマと照らし合わせながら熱心に教員と相談していました。

対面で開催できなかったのは残念でしたが、参加者からは有意義な話が聞けたとの声が寄せられ、教員や在学生との懇談を楽しまれた様子でした。



修了生 大橋 崇行さん、小説『遙かに届くきみの聲』で 第一回双葉文庫ルーキー大賞を受賞

日本文学研究専攻修了生(2011年3月修了)で東海学園大学 准教授の^{おおはしたかゆき}大橋崇行さんが自身の小説『遙かに届くきみの聲』で第一回双葉文庫ルーキー大賞を受賞しました。おめでとうございます。

大橋さんのコメント「研究ではなく小説創作での受賞ですが、博士後期課程で学んだ日本の近代文学に関わることを折り込んだ作品で賞を頂くことができました。今後もこうした作品を世に送ることで、日本文学の普及に貢献することができればと思います。」

当館データベースのご案内

当館ウェブサイトの「電子資料館」では、日本文学のみならず色々な分野の古典籍画像をダウンロードできる新日本古典籍総合データベースなど、様々なデータベースを公開しています。また、「古典籍画像を使う」では、国語、日本史の授業に使える画像の紹介も行っています。ぜひご活用ください。

- ▶ 電子資料館 <https://www.nijl.ac.jp/search-find/#database>
- ▶ 古典籍画像を使う <https://www.nijl.ac.jp/koten/image/>



当館 Twitter、Facebook、YouTube チャンネルのご案内

当館 Twitter や Facebook では、イベント情報やデータベース、基幹研究のことなどをタイムリーに発信しています。

また、YouTube チャンネルでは当館館長 ロバート キャンベルから皆様へのメッセージを動画にした「日本古典と感染症」などを公開しています。ぜひ、チャンネル登録をお願いします。



表紙絵資料紹介

『小町花あはせ』 [元禄9年]刊・小本1冊 *松野陽一文庫所蔵 [54-78]

歌書は、一にも二にも写本をもって上品とする。だから歌書の刊本などは単なる流布本に過ぎず、常に、必ずしも十全とは言い難い本文の「質」が問題とされてきた。しかしながら、江戸時代に生きた大半のふつうの人びとは、歌書刊本によって初めて自在に学ぶことが可能となったのであり、その意味で、歌書の刊本が「知」の基盤整備に果たした役割はまことに甚大であったと言わねばならない。

江戸も元禄期(1688-1704)に入ると、実にさまざまな歌書が刊行された。その数250点余り。特に、いわゆる「小本」には、絵入りや江戸版が目につくことが注意されるが、ここに紹介する『小町花あはせ』も、名もなき絵師による簡素な絵を伴った佳品だ。編者未詳。国文研の整理書名は「絵入名歌集」(帙題に拠る)だが、このほど内容を検した結果、書名は「小町花あはせ」と判明した(前・中・後を欠く)。他に知られる伝本は佐々木孝浩氏(慶應義塾大学附属研究所斯道文庫長)御珍藏の1本のみ。佐々木氏蔵本に拠れば、刊記は「元禄九丙子歳/正月吉辰/中野小左衛門/木村五郎兵衛/蔦林軒」。書名は小町の「花の色は」歌に因み、くさぐさの花に古歌をあてたのだという。
(神作 研一)

★松野陽一文庫は、松野陽一元館長より寄贈された古典籍から成る(全485点)。海野圭介・小川剛生・落合博志・神作研一編「国文学研究資料館所蔵松野陽一文庫分類目録」(浅田徹・小川剛生・兼築信行・神作研一・田淵句美子・堀川貴司 編『和歌史の中世から近世へ』所収、花鳥社、2020)参照。



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3
Tel:050-5533-2910 Fax:042-526-8604

国文研ニュースNo.58
発行日 令和3(2021)年1月20日
編集 国文学研究資料館 企画広報室
製作 株式会社 アズディップ
©人間文化研究機構国文学研究資料館